

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320096

研究課題名(和文) 日本列島諸方言音声の地域差と世代差に関する研究

研究課題名(英文) Regional and generational studies of phonetic variation in the Japanese Archipelago

研究代表者

岸江 信介 (KISHIE, Shinsuke)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：90271460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円、(間接経費) 2,610,000円

研究成果の概要(和文)：日本各地での音声記録するため、全国47都道府県において老・中・若各年層3世代を対象にした音声収録調査を実施し、約300名を超える方々の協力を得られ、全国の音声収集を終えることができた。調査項目数は最終的に700項目を越え、これらを読み上げて頂いた音声を音声データベース構築のため、音声編集作業が、このうち、外来語発音などの分析も行なった。

研究成果の概要(英文)：This project aims to establish a Japanese spoken language database. In order to pursue this, we recorded spoken language nationwide. As a result, we could store up to over 300 informant's sound recordings in 47 prefectures in Japan for 700 investigation items. For the creation of a Japanese spoken language database, we need a little more editing work. We work in parallel with the analysis of the pronunciation of loanwords.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言音声 音声変化 地域差 データベース化 ヴァーチャル方言博物館

### 1. 研究開始当初の背景

日本全国を対象とした方言音声の収録調査研究が本格化したのは、井上史雄を代表とする『日本語音声の地域差・世代差の音韻論的・音響学的分析』(総合研究A、1986~88年度)であり、この研究は、杉藤美代子を代表とする『日本語音声』(重点領域研究、1989~93年度)へと進展した。これらの研究が始動した時期から20年以上が経過したが、この間、木部暢子を代表とする西日本を対象とした研究(基盤研究(B)、2003~05年度・2006年~08年年度)はあったものの、全国規模での方言音声の地域差・世代差に着目した研究はなく、特定の地域に限定した形で研究が数多く行われているのが現状である。昨今、日本語の危機言語の視点にもとづく研究が国立国語研究所を中心に始まり、琉球方言や八丈島など、日本の周縁部の方言がもっぱら注視されているが、日本列島全体の方言音声も同時に消失の一途を辿っていることに変わりはない。杉藤以降、全国規模での日本語諸方言音声の調査研究は空白期が続いている。このような状況のもと、20世紀後半に行われた諸研究の継続と、当時の研究成果との比較を行うため、21世紀初頭時において全国的な方言音声の収録調査を実施し、音声変化の実態を解明することは、日本語の諸方言音声の過去・現在・未来において、きわめて重要な意味を持つに違いない。

本研究では、分担者として、日本語諸方言音声の地域差・世代差の研究に80年代後半に着手した井上をはじめ、重点領域研究『日本語音声』で杉藤を中心に補佐した田原が参加、西日本を中心に音声収録調査を木部とともに続けてきた岸江が代表者となって、21世紀初頭の日本語諸方言音声の実態を解明することを目的とする。

### 2. 研究の目的

1、に関連して、日本語諸方言にみられる音声上の特色をとらえ、全国レベルでの比較を通じて分析を行うことが急務である。例えば、金田一(1967)・柴田(1988)以降、モーラ方言、シラビーム方言について言及されることはあるものの、列島全体を対象とした実態調査にもとづく研究は皆無であり、伝統方言音声の消滅の観点からも、現段階での分布状況の解明と、音響音声学の知見を応用した研究により、究明が俟たれるところである。また、東北方言や出雲方言を視野に入れた、全国レベルでの中舌母音における比較研究も今石(1997)以降、影を潜めている。同様に、四つ仮名についても消失傾向が指摘されるものの(久野ほか1991)、高知県と九州各県との比較といった観点での研究も、全国的規模での調査研究は止まったままである。さらに日本各地に存在する連母音の同化融合による音声の消失傾向の実態調査も同様に行われていない。本研究では、このような状況のもと、生の音声資料の収集を軸に列島全体

の、特色ある方言音声の分布の解明をはかる。なお、全国各地で特色があった方言音声も昨今、急速に消滅の一途をたどり、標準化が進行するなかで進行中の変化に着目した研究が重要であり、伝統方言音声と同時に、若い世代の方言音声をも調査対象とし、最新の音声変化の実態を見出し、解明にあたる。

### 3. 研究の方法

地域差や世代差を考慮して収集した方言音声データを音響分析ソフトにかけて分析を行い、これまでに見出されていない地域差の発見や、方言音声上、特色とされている現象の実態を最新の資料により、明らかにすることをめざす。多変量解析等による統計的分析手法も援用する。

今回の研究組織のメンバーには、音響音声学的な視点から東北地方の中舌母音を研究テーマとする大橋、出雲地方での中舌母音と高知での四つ仮名をテーマとしている岸江、全国諸方言を対象にガ行子音の変遷について追及した井上、音響音声学的なアプローチ(-VOTの地域差の解明)を行っている高田のほか、アクセント研究を継続している大和がおり、さまざまな角度から全国規模の音声データの分析が可能となる。大橋、岸江、大和は、今石(2007)にも音響音声学に関連した論文を掲載しており、最新の分析成果が期待できる。

一方、方言音声の地理的かつ世代的な推移に関する考察と分析に関しては、クラスター分析、数量化3類、コレスポネンス分析などの多変量解析を井上・半沢・岸江が駆使し、地域差・世代差から諸方言間の音声の類似度の測定や諸方言音声の区画など、新しい変化に伴う諸方言の実態を明らかにする。

### 4. 研究成果

本研究の目的は日本列島における諸方言音声の地域差と世代差に注目し、変化の実態を解明すると同時に進行中の変化の様相をとらえ、その音声を記録・保存することである。

この目的を遂行するため、47都道府県各々の任意の2地点において若年層・中年層・老年層の3世代のいずれも生え抜きの方々を対象に音声の収録調査を実施した。この調査では、各都道府県の大学生に調査を委託する方法を採り、依頼を受けた大学生が調査員となり、まず自らの発音を録音したあと、父母世代、祖父母世代の話者に調査リストを提示し、読み上げてもらったものをすべて収録した。収集したデータは過去3年間において北海道から沖縄県までで524人分に及んだ。当初予定していた各県2地点×老・中・若3世代では、47都道府県×2地点×3世代=288分となり、今回、全体数としては大幅に予定を越えてはいるが、県毎で収集した地点が多かったり少なかったり、差が生じており、実際に収集ができなかったところもある。今後の

課題としたい。

データ分析の準備とその進捗状況については、すでに外来語に関する発音に地域差を見出しており、大量なデータの中からこの傾向の分析の一部を終了した。高年層世代では従来指摘されている発音の特色を保持しているものも多々あり、その分析の対象は多方面から期待されている。例えば、高知方言などの「トサ」の「サ」の発音などにはすでに伝統方言音声として知られた〔θ〕の発音なども収録できた。さらに徳島県などでも語頭における有声音〔d〕などに現れる入りわたり鼻音など、具体的にはこれまで音声そのものが提示されたことがなかったが、今回、この音声も収録が可能となった。

音声データベースである『方言ヴァーチャル博物館』の完全な構築までには至っていないが、構築するための編集作業は続けており、収録した音声を話者毎に整理し、音声分析ソフト Praat により、ほぼ全員の音声編集をほぼ終了した。また、各音声データをもとに、地域差・世代差といった角度から全国的な傾向を把握する課題が完全には達成していないが、外来語発音などの分析も一部行なっている。今後、この膨大なデータをもとにして、日本語諸方言の音声の分析をさまざまな角度から分析する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

①岸江信介、「書評」神部宏泰著『生活語の原風景』、日本語の研究、第 10 巻 1 号、査読有、2013、54-59

[http://www.jpling.gr.jp/kikansi/n\\_mokuji/n\\_mokuji\\_00601\\_01004/#vol-256](http://www.jpling.gr.jp/kikansi/n_mokuji/n_mokuji_00601_01004/#vol-256)

②峪口有香子、岸江信介、淡路島の語彙に関する研究—じゃがいも・さつまいも・さといも—、言語文化研究、21 巻、査読無、2013 年、121-139

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/pdf/lit21-8.pdf>

③岸江信介、村田真実、京阪式アクセントにおける 2 拍名詞の類の統合状況と低起無核型の消失傾向—大阪・奈良・三重・徳島方言を中心に—、音声研究、16-3、査読有、2012、34-46、日本音声学会

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009578107>

④岸江信介、清水勇吉、ビクトリア・ブローヤヤー、Geolinguistic Research by Questionnaire in the Kyushu District、*Papers from The First International Conference on Asian Geolinguistics*、査読無、2012 年、261-272

⑤劉潔、大橋眞、岸江信介、中国青島市における交通機関の言語景観についての一考査、徳島大学地域科学研究、査読無、2 巻、2012 年、67-74、徳島大学

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009573667>

⑥劉潔、大橋眞、岸江信介、中国青島市における観光スポットの言語景観について、徳島大学地域科学研究、査読無、2 巻、2012 年、75-83、徳島大学

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009573678>

⑦金徳鎬、岸江信介、瀧口恵子、慶北方言の知覚方言学に関する研究、言語文化研究、査読無、20 巻、2012 年、117-137、徳島大学

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/pdf/lit20-6.pdf>

⑧岸江信介、香川県伊吹島から大分県杵築市美濃崎への移住にみられる言語的特徴—語彙・文法・表現法の特色—、移住に伴う言語変容—香川県を例として、社会・文化との関わりを中心に—、瀬戸内海文化研究・動支援助成 A.調査・研究による研究成果報告書、査読無、2012 年、162-185

⑨岸江信介、香川県伊吹島から大阪府泉佐野市への移住にみられる言語的特徴—語彙・文法・表現法の特色—、移住に伴う言語変容—香川県を例として、社会・文化との関わりを中心に—、瀬戸内海文化研究・動支援助成 A.調査・研究による研究成果報告書、査読無、2012 年、90-104

⑩岸江信介、香川県から北海道洞爺湖町への入植 2 世～4 世話者にみられるアクセントの特色、移住に伴う言語変容—香川県を例として、社会・文化との関わりを中心に—、瀬戸内海文化研究・動支援助成 A.調査・研究による研究成果報告書、査読無、2012 年、21-29

⑪清水勇吉、石田基広、岸江信介、依頼に対する断り表現について、言語文化研究、査読無、19 巻、2011 年、147-162、徳島大学

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/pdf/lit19-8.pdf>

⑫李相揆、岸江信介、瀧口恵子、日本における方言研究の動向と展望、言語文化研究、査読無、19 巻、2011 年、163-190、徳島大学

<http://web.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/pdf/lit19-9.pdf>

[学会発表] (計 8 件)

①桐村喬、峪口有香子、岸江信介、方言分析資料としてのマイクロブログデータ—方言アンケート調査との整合性—、2014 年日本地理学会春季学術大会、2014 年 3 月 27 日～2014 年 3 月 29 日、国士舘大学世田谷キャンパス (東京都)

②峪口有香子、平井松午、岸江信介、地域言語に関する GIS 分析—瀬戸内海地域をフィールドとして—、2013 年人文地理学会大会、2013 年 11 月 9 日～2013 年 11 月 10 日、大阪市立大学杉本キャンパス (大阪府)

③岸江信介、方言東西対立の現状、第 152 回変異理論研究会、2013 年 10 月 26 日、静岡大学 (静岡県)

④峪口有香子、岸江信介、『瀬戸内海言語図巻』の電子データ化の試み—瀬戸内海域における方言通信調査による電子データとの実時間上の比較—、2013 年度中国四国日本語学会、2013 年 10 月 12 日～2013 年 10 月 13 日、サテライトキャンパスひろしま (広島県)

⑤峪口有香子、岸江信介、瀬戸内海地域の共通語化による言語変化、Urban Language Seminar11、2013 年 8 月 17 日～2013 年 8 月 18 日、広島市文化交流会館 (広島県)

⑥岸江信介・清水勇吉・ビクトリア・ブロイヤ、Geolinguistic Research by Questionnaire in the Kyushu District, The First International Conference on Asian Geolinguistics, 2012 年 12 月 14 日～2012 年 12 月 15 日、Aoyama Gakuin University, Tokyo, Japan (東京都)

⑦岸江信介、現代語の依頼・禁止に見られる配慮表現、シンポジウム:「日本語の配慮表現の多様性」、2012 年 09 月 22 日～2012 年 9 月 23 日、科学技術館 6 階第 3 会議室 (東京都)

⑧岸江信介、清水勇吉、伊賀上野方言調査にみられる伊賀方言の動向—大阪方言・伊勢方言との比較—、地域言語研究会 (平成 24 年度第 1 回研究報告会、2012 年 7 月 15 日、関西大学セミナーハウス「六甲荘」(兵庫県)

〔図書〕(計 17 件)

①岸江信介、清水勇吉、峪口有香子、塩川菜々美、先谷香保、高木美和編、徳島大学日本語学研究室、徳島県南部ふるさとことば—方言談話資料を中心に—、2014 年、293 (2-9)

②岸江信介、玉真之介、掛井秀一、清水勇吉、峪口有香子、澤周作、塩川菜々美、森岡裕介、天満啓貴編、徳島大学日本語学研究室、徳島県吉野川流域言語地図、2014 年、302 (2-14)

③井上史雄、明治書院、ことばの散歩道、2013 年、240

④井上史雄、田中宣廣、日高貢一郎、山下 暁美、大橋 敦夫、三省堂、魅せる方言—地域語の底力、2013 年、240 (頁数多岐に渡りカウントできず)

⑤木部暢子、岩波書店、じゃつで方言なおもしろとか、2013 年、199

⑥岸江信介、村田真実、峪口有香子、曾我部千穂、森岡 裕介、林 琳、徳島大学日本語学研究室、淡路島言語地図、2013 年、419 (1-21)

⑦国際化に伴う多言語表示推進グループ (代表: 岸江信介)、徳島大学日本語学研究室、『徳島における多言語表示に関する言語景観調査研究—多文化共生をめざして—』(徳島大学パイロット事業支援プログラム (社会貢献支援事業)、2013 年、214 (1-9)

⑧岸江信介、太田有多子、中井精一、鳥谷善史編、和泉書院、紀伊半島沿岸におけるアスペクト表現の変異、『都市と周縁のことば—紀伊半島沿岸グロットグラム—』、2013 年、359 (31-61)

⑨岸江信介、太田有多子、中井精一、鳥谷善史編、本書の企画と調査概要、『都市と周縁のことば—紀伊半島沿岸グロットグラム—』、2013 年、359 (1-5)

⑩岸江信介、荻野 綱男・田野村 忠温編、明治書院、第 2 章 質問調査のデータ分析方法、『講座 IT と日本語研究 8 質問調査法と統計処理』、2012 年、256 (65-106)

⑪岸江信介、共立出版、4. 自由記述によるアンケート調査からことばの地域差を探る、石田基広・金明哲編著『コーパスとテキストマイニング』、2012 年、256 (40-54)

⑫松森晶子、木部暢子、中井幸比古、新田哲夫、三省堂、日本語アクセント入門、2012 年、224 (62-77、94-105)

⑬岸江信介、西尾純二、村田真実、辰野由佳、徳島大学日本語学研究室、近畿地方中部域の言語動態—大阪・奈良・三重近畿横断グロットグラム調査から—、2012 年、166 (1-10)

⑭岸江信介、品川大輔、清水勇吉、峪口有香子、松田将平、徳島大学日本語学研究室、四国北部地方の言語変異—高松・愛南グロットグラム調査から—、2012 年、285 (1-12)

⑮井上史雄、明治書院、経済言語学論考：一言語・方言・敬語の値打ち—、2011 年、497

⑯真田信治、友定賢治、東京堂、『県別 罵詈雑言辞典 (岸江信介：三重県・徳島県・香川県・愛媛県担当)』、2011 年、384 (辞典のため、頁をカウントできず)

⑰岸江信介、岡部修典、清水勇吉、村田真実、  
徳島大学日本語学研究室、三重県志摩市のこ  
とば、2011年、295(1-10)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

①大修館WEB国語教室 第8回リレー連載  
四国のあいさつことば  
[http://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkou/relay002\\_08.html](http://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkou/relay002_08.html)

②徳島県吉野川流域における声の言語地図  
<http://www.ncc-1701.jp/abdunabi211/tokus-himavoicemap.html>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

岸江 信介 (KISHIE Shinsuke)  
徳島大学・大学院ソシオ・アンド・アーツ・  
アンド・サイエンス研究部・教授  
研究者番号：90271460

### (2)研究分担者

井上 史雄 (INOUE Fumio)  
大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国立国語研究所・時空間変異研究系・教授  
研究者番号：40011332

田原 広史 (TAHARA Hiroshi)  
大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授  
研究者番号：30207211

木部 暢子 (KIBE Nobuko)  
大学共同利用機関法人人間文化研究機構  
国立国語研究所・時空間変異研究系・教授  
研究者番号：30192016

半沢 康 (HANZAWA Yasushi)  
福島大学・人間発達文化学類・教授  
研究者番号：10254822

大橋 純一 (Ohashi Junichi)  
秋田大学・教育文化学部・教授  
研究者番号：20337273

久能 三枝子 (KUNOU Mieko)  
愛知学院大学・文学部・講師  
研究者番号：90468398

### (3)連携研究者

鳥谷 善史 (TORITANI Yoshifumi)  
天理大学・文学部・講師  
研究者番号：30412133

山下 暁美 (YAMASHITA Akemi)  
明海大学・外国語学部・教授  
研究者番号：10245029

高丸 圭一 (TAKAMARU Keiichi )  
宇都宮共和大学・シティライフ学部・准教  
授  
研究者番号：60383121